



I ッ セ イ

# 東方アレンジ音楽と 一般音楽の境界 - 後編

Black

BlackAsh <http://blackash.net/>

## 目 次

<つづきに>

<ロック>

[ ロック ] [ プログレッシブ・ロック ]

[ ハードロック / メタル ]

<クラシック>

[ オーケストラ ] [ ピアノ / ヴァイオリン ] [ その他 ]

<ジャズ / フュージョン>

<その他>

[ アコースティック・ギター ] [ 民族 ]

<おわりに>

---

## つづきに

---

「ねえ、どんな音楽聴くの？」

この無邪気な問いかけがどれだけ人を悩ませてきたか。ただでさえ自分が聴く音楽や歌手のことを話し相手が必ずしも知っているとは限らない。ましてや一般社会で知名度が皆無に等しい同人音楽を聴いている我々にとっては、音楽の話題は絶望的である。それを痛感しておられるだろう、前回の「テクノ - 電子音楽系」からこの稿をご覧になっている皆さまは、その後いかがお過ごしであろうか。きちんとこの稿の目的である「東方アレンジを聴く人が平凡な一般人を装うための一般曲の紹介」を踏まえて、圧倒的かつ絶対的に平々凡々とした一般人の回答をすることができたであろうか。私も前回の稿を物してからさらに研鑽を積んだ。日夜自らを鍛えるべく [Beatport](#) や [Juno Download](#) や [Boomkat](#) で購入を続けた<sup>1</sup>。そしてとうとう、私はその時を迎えたのである。

後輩のお嬢さん「せんぱ〜い、いつもヘッドホンしてますけど何聴いてるんですか〜？」

● lack「何でも聴くなー。テクノからクラシックまで」

後輩のお嬢さん「へえ〜、テクノってどんなのなんですか〜？」

B ● ack「ドンドンドンドンってビートが四拍子でね、そんで」

後輩のお嬢さん「あたしよくわかんないです〜。今聴いてるのは〜？」

Bl ● ck「あ、えーと…（手元の mp3 プレイヤーを見て） あ」

後輩のお嬢さん「今あってゆった〜！ なになにもしかして変なの聴いてるんですか〜？」

「[Jega : Nausicaa - Original Mix](#)」

ジャンルはドラムンベース〜エレクトロニカ、ドラムンベースの奇才μ-ZIQ 主催の伝統ある「[Planet Mu](#)」というレーベルの重鎮 Jega による曲、世界最大規模のクラブ系音楽 DL 販売サイト「Beatport」で販売しており、当然ながらとらのあななどの同人ショップでは売っていない、どう考えても一般曲であるはマジすいまえんでした> < だって Jega がまさか「風の谷のナウシカ」をリミックスしてるなんてコーラ噴いたそのモニタを拭く間も惜しんで速攻ポチっちゃうじゃないですか仕方ないじゃないですか。

ヘッドホンをかけた後輩のお嬢さんの「わけがわからないよ」的な表情にきゅんときた、至福のひと時であった。

閑話休題。

このような一幕から、私も修行不足を自覚して、さらに自らを鍛えるべく、続編つまりこの稿に向けて耳の幅を広げてきた。とにかく何でもダバハゼのごとく食い付いては聴きまくった。CD を買い、TSUTAYA で借り、片っぱしからリップニング<sup>2</sup>しては再生した。耳のケアにも気を遣った。余り大音量で聴くと難聴になるので音量は抑えめ、カナル式イヤホンは鼓膜に負担がかかるのでオープンエア型のヘッドホン。耳垢は溜めないように、けれど優しくかき出す

- 1 ちょうどダイエットを始めたのが運の尽きだった。すなわち「食わなくなると食事代が減るな」と思ってしまったことが全てだった。それから毎日アルバム 1 枚以上を延々と購入し、それがクレジットカードで逐一決済され、送られてくるクレカ明細が通常は 1 ヶ月分裏表 1 枚っぺらで済むところ、3 枚に達した時に全てを悟った。ああ、これがかの有名なかつぱえびせん状態ってやつか…

- 2 信じられないことに、ついこの間 1 テラハードディスクが全て音楽で埋まってしまった。全ての動画と画像を削除したスティックすぎるハードディスクである。どんなに容量が足りなくなってもこれだけは、と大切に保存してきた秘蔵のアレな動画にも血涙とともに別れを告げた。鼻をすすり、涙でにじむモニタを見詰めマウスをクリック、ごみ箱を空にした瞬間「C ドライブに退避させておけばいいじゃん」ということに気付いて窓から飛び降りそうになったのも今ではいい思い出である。ちくしょう… ちくしょおおおおおおおおおおお！

ように<sup>3</sup>。

これだけ音楽を聴いていると耳が一对しかないことが本当に口惜しい。あともう一对くらいあってもいいだろう、と痛切に思いつつネコ耳少女画像スレを眺める。そんな修行を重ねた日々であった。

その成果をこの第九回例大祭で存分にお見せしよう。東方アレンジを聴く人がつつがなく一般社会で過ごせるように、音楽の話を振られても挙動不審にならず堂々と受け答えできるように、以下に東方アレンジで見られるジャンルとそれに属する著名なサークルを挙げ、ジャンルごとに一般曲で有名そうなもの、ついでに東方アレンジ聴きが好きな曲調のものを、まとめて紹介した。そんな私の想いが詰まったこのジャンル別一般楽曲紹介エッセイ、後編はロック、クラシック、ジャズがメイン、なかなか充実したジャンルである<sup>4</sup>。

## ロック

のっけからどうしていいかわからない。前回と同じ書き出しで申し訳ないが、ロックとかマジで広すぎてジャンル分けに困りすぎる。ゴスペルの影響が云々とかどうでもいいから、もうギターがぎゅんぎゅん鳴っていれば全部ロックでいいじゃんとか言いたくなる。まあ書き始めた以上そういうわけにもいかないので、以下このジャンルの細分化として、簡単ではあるが「ロック」「プログレッシブ・ロック」「ハードロック/ヘビーメタル」と設定する<sup>5</sup>。異論は認める。

### [ ロック<sup>6</sup> ]

ロックは東方アレンジの代表ジャンルとも言ってもよいだろう。昔からギターに親しんできた人たちは多い。代表的なものとして「[dBu music : 弾奏結界シリーズ](#)」のギターものはシンプルなロック、「[岸田教団](#)」はスピード系でノリがよく、「[Minstre!](#)」は典型的王道ロック、そしてもう東方アレンジは長らく手がけていないようであるが「[光収容の倉庫](#)」の軽やかなギターさばきも記憶に残る。また、個人的に注目しているのは「[minimum electric design : focus and defocus](#)」のポストロック系である。

そんな感じのロックアレンジサークルを聴かれる皆さまへ、じゃあそもそもロックって何よと訊かれた場合に挙げるならば、定番中の定番「[Eric Clapton : Layla](#)」である。ギターのメロディに聴き憶えがある人もいるだろう。「[The Beatles : I Want To Hold Your Hands](#)」や「[Queen : Bohemian Rhapsody](#)」はもはや説明にも及ばまい。全世界で1億枚以上のCDを売ったグループ「[Guns n' Roses : Welcome to the Jungle](#)」は本当にかっこいいと思う。同じく「[Guns n' Roses : November Rain](#)」もバラード調で人気を博した。もうひとつバラード代表、世界で最も重要なロックバンドとも評される「[R.E.M. : Everybody Hurts](#)」は売れに売れた。そして忘れてはいけない日本人が大好きな「[Nirvana : Smells Like A Teen Spirit](#)」の不気味な迫力もロック代表にふさわしい。

3 自宅の近くにあるひざまくら耳かき屋に行きかけたがすんでのところで思いとどまった。あの看板の浴衣姿は反則だろ…

4 注意事項は以下のとおりである。

- (i) 私は音楽の専門家ではなく、ただ広く浅く音楽が好きというだけで、以下のジャンル分けとその説明は必ずしも正しいとは限らない。また、ジャンル分けと一般曲選択の段階で、私の主観に基づき多少東方アレンジ諸作品の傾向に寄せている。
- (ii) ハイパーリンクによる試聴は、公式 youtube、公式 VEVO、公式 MySpace その他公式試聴と確認できたもの、そしてダウンロード販売サイトの試聴に限定する。試聴がないものについては公式サイトやCD 販売サイトで確認できればハイパーリンクを張る。各自自己責任により必要に応じてのご確認を願いたく。
- (iii) 上記 (i) の方針により、試聴できる曲は必ずしもフルバージョンではない。
- (iv) ジャンル分けについて、極端な細分化は不要と判断し、一般的なダウンロード販売サイトの記載を参考にした。ジャンルの説明は wikipedia 以外にも様々な文献を参考にした。
- (v) 専門用語は極力使わないか、使う場合は説明を脚注に記載する。読んでいてわからないから。一部の専門用語を一般的な表現に置き替えているが、稚拙なものだとしてもご容赦願いたく。
- (vi) 曲の選択、紹介、感想は全て私の主観に基づき、エッセイの目的を重視して記載した。
- (vii) セディーユ、アクサン・テギュ、ウムラウトなどのアクセント記号は全て省略した。

5 パンク・ロックは東方アレンジ CD でまるまる1枚にその名を冠したものを寡聞にして見かけないので除外した。パンク・ロックの一般曲をロックに含めて紹介している。

6 いわゆる普通のロック、と言ってもピンと来るか来ないか、まあ皆さまが一般的に「ロック」だと思っているものを想像してもらえばいい。最も耳にする機会が多いジャンルのひとつであろう。ギター、ベース、ドラムを基本構成として、ボーカルが入ったりキーボードが入ったり、いろいろな形態がある。曲調はまちまちだが、だいたいドラムは4拍子の [8 ビート](#) か [16 ビート](#) などところが特徴らしい特徴かと思われる。

ただ、ドラマーはシンプルなドラムだけでは面白くないとばかりに手を変え品を変えドラムテクニックを披露するので、いったいリズムがどうなっているのかさっぱりわからない時もある。ましてや少しずつリズムをずらしていく「スリップ・ビート」などをやられた時には混乱の極みだ。例えば現代最高峰のドラマーと言っている Vinnie Colaiuta (ヴィニー・カリウタ) が参加している「[Karizma : I' m Tweaked](#)」などは、初見ではリズムが刻めず何が何だかわからなくなること間違いない。



ロックを手掛けるアーティストは本当に星の数ほどいるので、どれを紹介すべきか迷いに迷った上、私が好きなのを片っぴしから出すことにした。まず海外から、ドラマティックな「[My Chemical Romance : Welcome to the Black Parade](#)」はどうだろう。My Chemical Romance と双璧をなす<sup>7</sup>「[Kasabian : Underdog](#)」はシンプルでかっこいい。ダサそうに見えて一周回ってポップでスタイリッシュな「[The Killers : Read My Mind](#)」<sup>8</sup>はイギリスで大人気だ。女性ボーカルなら「[Evanescence : Bring To Me Life](#)」は音のみならずヴィジュアル面も含めて素晴らしいパフォーマンスだ。泣きのバラードなら「[Matchbox Twenty : Bed of Lies](#)」は減入っている時に地味に効く。また、変わり種というわけではないが、Queen ライクな壮大な音遣いとコーラス、ロックに留まらないマルチジャンルで一時期人気を博した「[Valensia : Gaia](#)」の初期も面白い。

力強い音が聴きたいけどあんましごちゃごちゃしてないシンプルなの、というならパンク・ロック<sup>9</sup>だろう。パンクの元祖「[The Sex Pistols : Anarchy in the UK](#)」は、女王エリザベス 2 世をこき下ろすなどの反体制的な歌詞でイギリス公安からも目をつけられていたらしい。そこまでアナーキーじゃなくていいよというなら「[The Offspring : Greatest Hits](#)」収録の「The Offspring : Hit That」はシンプルにアツい。もっとキャッチーな、ダンスフロアでもノれるようなポップ・パンクならば「[Cash Cash : Party in Your Bedroom](#)」あたりはどうだろうか。

日本だって忘れちゃいけない。B'z、ミスチル、サザン、グレイにラルク、パンプなどは余りにメジャーどころ、今更なのでいいだろう。ひとつだけ、私は「[The Blue Hearts : Too Much Pain](#)」が大好きだ。年を取ってますますじんわり来る。ついでに「[REBECCA : ラヴ・イズ・Cash](#)」は素晴らしい<sup>10</sup>。

まあおっさん乙はここまでにしておいて、っともしかして「[YEN TOWN BAND : Swallowtail Butterfly ～あいのうた～](#)」もダメですかね。「[サニーデイスーパース : 海岸行き](#)」も？「[MONGOL800 : 小さな恋のうた](#)」までも？ そんな古くないよね、と思って今調べたら全部 10 年前だったことに絶望した。10 年前を昔って思わなくなってるんだな。もうダメなのかな、俺…

いやいやこんなところで老けこんではいられない。ハードなギターがシンプルにかっこいい「[FAT PROP : Close My Eyes](#)」で沈んだ気分を吹き飛ばそう。「[RIZE : Live or Die](#)」ならポップに楽しそうでいい感じ。バラードだって「[ストレイテナー : Lightning](#)」のしっとりとしたボーカルに浸っていつてしまう。女性ボーカルなら、最近はひぐらしとかアニメ系の主題歌を歌っている「[Zwei : Dragon](#)」なんかいいじゃない。

そして私が気に入っており、東方アレンジ好きにもいけるんじゃないかと思うのが、日本のポストロックバンド「[MONO : Follow The Map](#)」のクラシック系をベースにギターを合わせて醸し出す映画のような情景だ。やや前衛的なポストロック、インストものなので退屈に感じる人がいるかもしれないけれど、そこは東方原曲や東方インストアレンジを聴いている皆さまならきっと大丈夫。もうひとつ「[MONO : Ashes In The Snow](#)」も 10 分超の大作で聴きごたえがある。海外を回って鍛えられているからか、繊細な中にもなかなかタフな芯が通っているような気がする。

## [ プログレッシブ・ロック ]

このジャンルを一口に説明するのは難しい。「プログレッシブ」とは「先進的な・前衛的な」という意味であるが、ロックに軸足を置きつつも従来のロックのスタイルから飛び出て他のジャンルの奏法や曲調を取り入れていく前衛的なスタイルによって作られたロックというイメージだ。その特徴は取り入れる手法やスタイルによって多岐に渡るの

- 7 実際にインタビュー等で My Chemical Romance に喧嘩を売っている。  
8 PV は日本で撮影されている。我々がよく知っているあの緑色の恐竜も出演ですぞ。

- 9 テクニックよりも力強さがメインのシンプルかつ攻撃的なギター進行が特徴。メタルとの違いは、パンク・ロックよりもメタルの方が複雑な進行を見せるところにある。いわゆる「[パワーコード](#)」という音が聴かれる。しばしば反体制的な歌詞とパフォーマンスで物議を醸していた。

- 10 え？ メロが「[Madonna : Material Girl](#)」まんま？ 気にしない気にしない><

でまとめるににくいのであるが、往々にして長尺でインストものも多く、複雑な構成に伴い演奏技術も高い傾向にある。東方アレンジでプログレッシブ・ロックと言えば「[Fragile Online : 百鬼夜行](#)」を始めとする Fragile Online 初期のアレンジだろう。高い技術に裏付けられた変拍子や「本歌取り」はバラエティ豊かである。もう少し新しいものだと「[AQUARIA MUSICS : 恐怖の幻想改革](#)」がオルガンやメロトロン<sup>11</sup>を駆使したプログレッシブ・ロックだ。ただ、少し一般向けに味付けされているとはいえ、プログレッシブ・ロックは耳が慣れていないとなかなか聴きにくいからだろうか、アルバムまるまる1枚プログレロックというのはそれほど多くはないようだ。

一般曲でプログレッシブ・ロックといえば定番中の定番「[King Crimson:21st Century Schizoid Man](#)」からであろう。前衛的であるがゆえにやはり一般向けには少々ハードルが高い曲調ではあるが、プログレッシブ・ロックがどのようなものなのか、という点では極めて分かりやすい。やや古めではあるがプログレッシブ・ロック史に燦然と輝く名盤「[Hatfield and the North : The Rotter' s Club](#)」は、複雑な演奏の中にジャズやらポップスやらが詰め込まれてプログレッシブ・ロックの魅力が密度も高く凝縮され、非常に素晴らしい作品、つまり実に分かりにくい作品である<sup>12</sup>。同じく古く、かつ全くもってわかりにくい「[Van Der Graaf Generator : The Least We Can Do Is Wave To Each Other](#)」の Peter Hammill の超個人的なボーカルを軸にした楽曲は、オルガンのバロック調メロディと絡み合って何だか妙な領域に飛んでいきそうだ。70年代ばかり紹介していても何なので少し新しい90年代を見ると「[Anekdoten: Vemod](#)」はエレキギターとメロトロン、オルガンが交錯して時に暴力的に、時に叙情的に、アルバム通して緊張が抜けない一作である。もうひとつ90年代デビューのバンドの最近の作品「[Porcupine Tree : Deadwing](#)」は重めのエレキギターの中、メロトロンの調べとともに浮かんでくる抒情が特徴である。なかなか個性的でかっちりとはまりにくい曲調であるが、その分はまった時の感動は素晴らしいプログレッシブ・ロック。特に私が気に入っているお勤めは、クラシック調そして女性ボーカルと初心者にも聴きやすくかつ新しい「[Thieves' Kitchen : The Water Road](#)」である。全体を通して何となく北欧系、ゆったりと長尺の各曲はじんわりと染みる。

## [ ハードロック／ヘビーメタル ]

よく「HR / HM」と略されているこのジャンルは日本でも人気があり、皆さまも親しみがあるだろう。非常に激しい、しばしば歪んだエレキギターのうねりがぎゅんぎゅんと押し寄せ、どこどかと超ハイスピードで鳴りまくるドラムとビート、曲間でギターソロが見せ場を作り、シンセサイザーが上の方できらきらと輝く場合もある。ボーカルがある場合はしばしばシャウトし、時にデスボイスと呼ばれる情熱的という表現を超えたゴウゴウとした叫びを織り交ぜる。そんな作風である。

東方アレンジでこのジャンルに取り組むサークルはそこそこ見かけられる。その中で代表といえばまずは「[Demetori](#)」であろう。安定したというレベルを超えたテクニックとアレンジ技術は卓越の一言に尽き、ファンも多いと思われる。「[UI-70](#)」の初期そして最近の作品もメタルアレンジとして定評がある<sup>13</sup>。また、同じく確固たる技術と構成に裏打ちされた「[IRON ATTACK !](#)」の各曲も強烈な印象を残す。重厚な「[CROW'SCLAW](#)」、そしてもうひとつ、もうサイトも消えてしまったが「MyonMyon」の疾走感あふれるギターも素晴らしいものがある。

11 アナログテープを再生するキーボード式サンプラー。といわれてもなかなか分かりにくいところなので頼りになる [Wikipedia](#) 先生へどうぞ。アナログな音に味わいがあり、抒情的なシーンを描き出す。

12 今でこそ評価は高いが、1975年のリリース時にはちっとも売れなかったようである。そのためだろうか、アルバムたった2枚のリリースで Hatfield and the North は解散してしまっただが、その後徐々に評価が高まり、最初の解散から実に30年後に再結成。メンバーの入替も激しい。歴史あるバンドである。

13 4作目～6作目がメタルメインのアレンジではなかったのでこのような書き方になった。決して中期の作品が云々ということではないどころか追ってフュージョンのところで紹介するのであしからず。

ここで「ハードロック／ヘビーメタルと言えど」という書き出しは危険だろう。HR／HMにも色々なジャンル分け<sup>14</sup>があり、メタラーの好みは千差万別である。以下は代表的なバンドをまず挙げて、そして東方アレンジリスナーの皆さまが好きなものを徐々に紹介していこう。

私が最初に触れたハードロック／ヘビーメタルの奏者がYngwie Malmsteenである。私がファミコン版ドラクエ1,2,3に興じていたころ、この超絶速弾きギタリストはエレキギターに革命を起こしてしまった。デビューアルバム「[Yngwie Malmsteen : Rising Force](#)」で見せた圧倒的な速弾きと同居する華麗なメロディライン、そして「[Yngwie Malmsteen : Odyssey](#)」は私の耳を完膚なきまでにぶち壊した。そして、彼が満を持して（あのジャケットとともに）リリースし、はるか極東の地でオリコン1位に堂々と（あのジャケットで）君臨した伝説の（ジャケットの）アルバム「[Yngwie Malmsteen : Fire & Ice](#)」（のジャケット）にはいろいろな意味（のうち8割はジャケット）で感動した。しかしその次の「[Yngwie Malmsteen : The Seventh Sign](#)」には本当に感動した。ベタで申し訳ないが「The Seventh Sign」「Brothers」は名曲だ。さらにここからよくわからないけどバックにオーケストラを従えてクラシックとの融合を図ったと思いきやちっとも融合しないインギー様ワールズのCDをぶっ放したり、などと書いていくと別途彼の体重の推移<sup>15</sup>に着目するなどして3ページほど行ってしまいそうなので泣く泣く割愛、とりあえず「[Yngwie Malmsteen : Black Star](#)」は聴いておくべきだ。

先を急ごう。他にも重鎮はたくさんいるが、「[Megadeth : Holy Wars... The Punishment Due](#)」の鉄板的なカッコよさ、「[Helloween : Eagle Fly Free](#)」の朗々たるボーカルのスタンダードっぷり、「[Iron Maiden : Fear of the Dark](#)」の王道の不気味さ、徐々に東方アレンジ聴きの好みを模索していくと「[Dragonforce : Through The Fire and Flames](#)」のクサクサクなカッコよさにハーマン・リとサム・トットマンのソロプレイ競演<sup>16</sup>、そしてもうひとつ東方アレンジ好きにはきっとたまらないだろうオペラとメタルの融合、魔法と剣の物語「[Rhapsody \(Rhapsody of Fire\) : Symphony of Enchanted Lands](#)」に収録されている「Emerald Sword」は必聴中の必聴だろう。一時期隆盛を誇ったラップメタルから「[Limp Bizkit : Nookie](#)」<sup>17</sup>も捨てがたい。

日本も負けてはいない。賛否はあるが「X (X Japan)」はどうしたって外せないだろう。いわゆる「ヴィジュアル系」の走りでもある彼らの音楽は鮮烈な印象を残す。残念ながら公式の音源が少ないが、「[X Japan : Rusty Nail](#)」あたりは著名である。また、忘れてはいけない日本の正統派ヘビメタ「[聖飢魔II : 蜥人形の館'99](#)」<sup>18</sup>やコミカル系<sup>19</sup>ヘビメタ「[Sex Machineguns : みかんのうた](#)」は王道である。

さて新しめの、と言ってもたくさんありすぎるので、ここもやはり東方アレンジ聴きが好みそうなものを少しばかり、まずは「[Nightwish : Amaranth](#)」はフィンランドのシンフォニック系女性ボーカルハードロック、「[Fleshgod Apocalypse : The Violation](#)」のこれもシンフォニック系ではあるがデスボイスが轟々と、たまに挟まる朗々としたボーカルが気持ちよい。日本の「[Crossfaith : Monolith](#)」最新作のデスボイスもカッコいい。ややアニメ寄りとなるのでこの稿の目的からして紹介しにくいところではあるが、女性ボーカルの力強い「[陰陽座 : 甲賀忍法帖](#)」あたりも日本のメタルとして人気がある。

変わったところでのお勧めとして「[Eluveitie : Inis Mona](#)」は民族楽器を使ったフォーク・メタル、最新作「[Eluveitie : Havoc](#)」でもぱっちりシャウト、ここは女性ボーカルも擁して「[Eluveitie : A Rose for Epona](#)」と異なったイメージで攻めてくる。いろいろあるものである。

14 デス、スピード、パワー、シンフォニック、スラッシュ、オルタナティブ、ゴシック、クラシック、ネオクラシカル、メロディックスピード、プログレッシブ、グライندコア… 枚挙に暇がないとはこのことである。

15 他のあらゆる点において彼の輝きには敵うべくもないけれど、ひとつだけ、体重については彼にとっても親しみを感じるのだ。

16 紹介したビデオの3分21秒から、ギタリストの手を拡大して映してくれている。これからエレキギターを始めるあなたにぴったりのソロプレイ入門である。

17 半年以上前ではあるが、ウェス・ボーランド再加入、10年ぶりのオリジナルメンバー復活ニューアルバム記念ということで、「Rage Against The Machine」よりもこっちを。でも新曲の「[Gold Cobra](#)」、まあまあなんだけど個人的には何かもうちょっとこう、欲しいなあ。

18 1986年のオリジナルよりもこの99年リメイクの方が（当然ではあるが）比較にならないほど技術やアレンジ構成がよい。

19 ただの「色モノ」でくくるのを躊躇うほど高すぎる技術と楽曲構成力を備えており、ジャパニーズメタルの鉄板的存在でもあるのだが、いかんせんこのような捉えられ方がしばしばである。



また、ロックやハードロック／ヘビーメタルの垂流として、ややキャッチーなメロディに普通の声と絶叫ボイスとを使い分けて高ぶる感情を吐露する「エモ／スクリーム」というサブジャンルも近時東方アレンジで見られるようになった。「[Foreground Eclipse : Each And Every Word Leaves Me Here Alone](#)」が筆頭であろう。一般曲では例えば「[Silverstein : My Heroine](#)」や「[The Used : I Come Alive](#)」が定評あるバンドである。ついでに「エモ／スクリーム」と同系統のシャウトもあるが、より実験的な音楽を試みるジャンル「ポスト・ハードコア」では日本の「[envy : Worn heels and the hands we hold](#)」が素晴らしい。

## クラシック

「クラシック」というジャンルをひとまとめにして詳述する。この所業に躊躇いを感じない人があるだろうか。私はクラシックをこよなく愛するのであるが、自分で弾けるかという残念ながらピアノをほんの少しかじった程度しか経験がない<sup>20</sup>。また、クラシックの長大な歴史、様々な楽器に様々な演奏形式の全てを語り尽くせるほどの学問を修めたわけでもない。ただ「ピアノとヴァイオリンで味付けがされていれたいクラシック系」的な昨今の風潮に、時代とは移ろいゆくものと実感するのみの頭の固いおじさんである。しかし、音楽はすべからず聴かれるべきとする命題からすれば、作り手ではなく聴き手が時代をリードすることもあるという事実は拭い難い。したがって、ここで言う「クラシック」とは、ぱっさりと「西洋の伝統的な音楽」というくくり方をすることにしよう。つまり、何かヨーロッパ風のピアノとかヴァイオリンとかトランペットとかの音色を使った、多かれ少なかれ芸術性を含んだ伝統的な構成の音楽はだいたいクラシック、ということにするのである。異論は認める。

東方クラシックアレンジの中でもオーケストラアレンジといえば「[WAVE](#)」の重厚な作風は出色である。「Symphonic シリーズ」の高い完成度は群を抜いている。また、初期「[趣味工房にんじんわいん](#)」の「桜 - 紅響楼閣」や「雅 - 幽冥歌聖」も頒布された当時の反響が大きかったことを憶えている。オーケストラアレンジと言っても生演奏を揃えるというのは同人活動では無理があり、だいたいがシンセを使った打ち込みであるが、その重厚さを出すためには機材的になかなか難しいところがあるようだ。小品を入れず、アルバム一枚まるまる重厚長大なオーケストラで統一というのはそれほど多くはない印象である。

ピアノをメインにしたピアノアレンジは数多い。やはり人口に膾炙していることの証左であろう。その筆頭として「[Everfades : Reverie](#)」「[アルトノイラント : 帰るべき城](#)」「[雪の足跡 : 東方的幻想曲集](#)」の3枚は外せない。また、「[しまいブラザーズ](#)」の「春夏秋冬シリーズ」も連弾を駆使していろいろな角度からピアノアレンジというものを広げていった作品群として著名であろう。有名どころで言えば「[Bitplane : The Secret of Alice](#)」もピアノアレンジとカテゴライズすることができる。

もうひとつ親しみのある楽器ヴァイオリンは「[TAMUSIC](#)」全般のヴァイオリン生演奏が筆頭であろう。以前私は「特にクラシック系の同人レベルの生演奏はプロの生演奏に遠く及ばない」と明確に書いた<sup>21</sup>。その考えは今でも変わっていない。しかしながら、それでも音楽というものが技巧を楽しむのみではなく、そこに「可能性」というものが秘められている限り、それは十分に聴くに値するものと言えるだろう。

20 子供のころに強制的に習わされた「バイエル」が心から面白くなく、苦痛で仕方がなかった。余りにもつまらないのでドラゴンクエストのテープ（懐かしきカセットテープの時代である！ 高級ノーマル、クロム・ハイボジ、メタルのどれがいいのか、少ないお小遣いを握りしめて録音媒体を選びまくった時代である。）に付属の楽譜で練習しては、学校の教室に備え付けのオルガンでドラクエの音楽を弾いていた。級友にはウケたが、当然ながら「変人」にカテゴライズされていた。しかも昔から<s>デブ</s>体格がよかったので、でかい身体でオルガンを弾くそのギャップに、しばしばいろいろな「標的」になったものである。画紙を踏みつくと結構痛いことや、頭から水を被ると結構冷たいこと、教室の掃除用具入れの中は結構臭うこと、1週間親以外にしゃべる相手がいなくて結構言葉を忘れることなど、いろいろなことを学んできた。それでも今こうして好きな音楽を聴きながらそれなりに生きているのだから、人生は音楽があれば何とかなるものである。「音楽があれば何とかなる」と言えば、社会に出てからも音楽のおかげで首を吊らなくて済んだ経緯が何か話が思い切りずれてきたような気がする。これはまたの機会にすることとしよう。

21 Black『「生演奏」というカテゴリ』（東方音団録 Ver.1 所収）

このようなクラシック系アレンジを聴く人に対して、どのようにしてクラシックを紹介していくか、その項目立ては悩ましい。原曲という基盤がある東方アレンジに対して、オリジナルのクラシックは指揮者の解釈や奏者の個性によって音色から構成まで差異が生じ、ある特定の曲について安定して同じものが聴けるということはない。しかも世に出回っている CD は基本的に技術的そして音質的にもトップレベルであるので、後は聴く人の好みということになりがちである。

私は2日間の考慮<sup>22</sup>を経て「単曲よりも全体像を」という考えに至った。まずは演奏形態で項目分けして、そこから奏者・指揮者・レーベルに注目して客観的な売上等や各種評論において定評があり、かつそこそこ手に入りやすい<sup>23</sup>CD を紹介していくことにする。いわゆる「この曲を聴くならまずはこの CD で」という感じだ<sup>24</sup>。ぜひとも、奏者や指揮者、演奏楽団などのキーワードで検索し、好みのクラシックを見つけてほしい。

## [ オーケストラ ]

ひとくちに「オーケストラ」と言ってもその種類は多義的である。管弦楽団つまり管楽器と弦楽器で合奏される大規模なものは「交響曲」、もう少し規模が小さくなり、かつ独奏があるものを「協奏曲」、それ以外の小規模のものを「室内楽曲」「管弦楽曲」と言うようだ。演奏規模の大小、独奏が入るかどうかで自分の好みを見てみるといいだろう。以下はよく見る「東方オーケストラアレンジ」の特徴に鑑みて「交響曲」を紹介していく。

クラシックの華「交響曲」。交響曲と言えばベートーヴェン、モーツァルト、ハイドンであろう。ベートーヴェンは生涯に9本の交響曲を書いたが、いずれも大作である。特に有名な「[Beethoven : 交響曲第5番『運命』\(Carlos Kleiber 指揮、ウィーン・フィル\) \(1974年、Grammophon\)](#)」の重厚さと「[Beethoven : 交響曲第6番『田園』\(Bruno Walter 指揮、コロンビア交響楽団\) \(1958年、SONY\)](#)」の牧歌的明るさは対比としても必聴。そして超有名な「第九」<sup>25</sup>は、残念なことにモノラルで音が古いが、クラシックの音に慣れてきたらぜひとも「[Beethoven : 交響曲第9番『合唱』\(Wilhelm Furtwangler 指揮、バイロイト祝祭管弦楽団\) \(1951年、EMI\)](#)」を聴いてみてほしい。フルトヴェングラー渾身の指揮は、第二次世界大戦終戦直後の「歓喜」を十二分以上に表現している。モーツァルトは41作の交響曲を残している。ベートーヴェンに比べると明るめな作風<sup>26</sup>だが、数少ない短調で書かれた「[Mozart : 交響曲第40番 \(Rafael Kubelik 指揮、バイエルン放送交響楽団\) \(1980年、SONY\)](#)」<sup>27</sup>の第一楽章冒頭の旋律は、かなりの方々にて聴き憶えがあるはずだ。

生涯に104作もの交響曲を書いたハイドンは「交響曲の父」と呼ばれるが、その曲は前二者と比べて少し地味で余り聴かれていないようだ。例えば「[Haydn: 交響曲第100番『軍隊』\(Frans Bruggen 指揮、18世紀オーケストラ\) \(1992年録音・Decca\)](#)」などは、古楽器<sup>28</sup>であるが非常にキャッチーで聴きやすい。

以上「初心者聴きやすさ」という観点から挙げてみたが、交響曲には他にも素晴らしいものがたくさんある。少し慣れてきたら、例えば人生に疲れた時に「[Tchaikovsky : 交響曲第6番『悲愴』\(Herbert von Karajan 指揮、ウィーン・フィル\) \(1980年、Grammophon\)](#)」でどっぷりと沈みこんでみるのはいかがだろうか。チャイコフスキーはこの初演後わずか8日で亡くなってしまう。最終楽章はまさに消え行く人生である。また、じんわりと盛り上がりたい

22 その間たっぶり神主新譜「[鳥船遺跡 ～ Trojan Green Asteroid](#)」を聴き込んだ。蓮メリ、特にメリーの愛らしさは筆舌に尽くし難く、また新曲「トロヤ群の密林」のトライバルビート×神主節のハーモニーが素晴らしく、全ての悩みが霧消していった。2日後に悩みを忘れていては原稿が進まないということに思い至り、30秒で決定した。

23 Amazon で安く買えたり、渋谷 TSUTAYA その他の TSUTAYA にあるという程度の手に入りやすさである。

24 演奏者（指揮者）、演奏楽団、録音年、レーベルという紹介である。同じ演者でも録音した年やレーベルが違うと音が違う。注意してほしい。

25 「第九」といえば「プリントゴッコ」のCMを思い出してしまう世代である。プーリーンートーゴッコーゴッコープーリーンートーゴッコー。

26 モーツァルトの交響曲のうち短調で書かれたものは2作しかない。

27 Bruno Walter 指揮、ウィーン・フィル（1952年、SONY）が情感と旋律のバランスからしてベストだと思うが、SONYのモノラル録音ではさすがに音が悪すぎる。よって、モーツァルトらしい美しさが顕著なクーパーリック盤を筆頭にしたい。

28 現代のクラシック楽器はその歴史において様々な改良を経ているが、そのような改良を受ける前の古式ゆかしい楽器を指している。現代の楽器とはピッチが基本的に違い、演奏も基本的にさくさく進むことが多い。紹介したブリュッヘンは古楽器演奏指揮の第一人者である。



なら「[Dvorak:交響曲第9番『新世界より』\(Istvan Kertes 指揮、ウィーン・フィル\) \(1961年、Decca\)](#)」はいいが。ドヴォルザークの望郷の思いが徐々にぐいぐいと、そして第四楽章冒頭は間違いなく聴いたことがあるだろう。

しばしば言われる「クラシックは難解なもの」というとつぎにくさを恐れずに行くならば、マーラー、ブラームスそしてブルックナー、この3人は「クラシック道にそびえる壁」どころか「クラシック初心者の敵」と言っても過言ではないだろう。いずれも長い。暗い。そしてよくわからない。初心者には格好の睡眠導入剤である<sup>29</sup>。これらを学校の音楽の授業で聴かされて、どうにもゆらゆらと進む進行にうつらうつらと船を漕ぎ、先生に頭を叩かれてクラシック嫌いになった人が毎年全国で2000～3000人ほどいるという<sup>30</sup>。

それでもこの長い道を登り始めるというならば、マーラーなら「[Mahler:交響曲第1番『巨人』\(Bruno Walter 指揮、コロンビア交響楽団\) \(1961年、SONY\)](#)」が比較的入りやすいだろう。ブラームスの哀愁が極まる「[Brahms:交響曲第4番 \(Carlos Kleiber 指揮、ウィーン・フィル\) \(1980年、Grammophon\)](#)」は人気が高い。これらを聴いて「イケる!」と思ったならば、ベートーヴェン「第九」とともに交響曲の最高傑作のひとつに数えられる「[Bruckner:交響曲第8番 \(Gunter Wand 指揮、ベルリン・フィル\) \(2001年、RCA\)](#)」を聴いてみるといいだろう。自然や宇宙の神秘というものがもしかしたらつかめるかもしれない<sup>31</sup>。

## [ ピアノ／ヴァイオリン ]

ピアノとヴァイオリンの音色が好きな人はまずこちら。「協奏曲」「室内楽曲」は、大規模で華々しい演奏よりも、ある楽器の音色をしっかりと楽しみたい人向きである。室内向きの小品が多い。

まずは演奏の規模が大きめな協奏曲から。世界四大ヴァイオリン協奏曲<sup>32</sup>の2つ「チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲」<sup>33</sup>「メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲」が1枚のCDに収まり、それを演奏しているのが史上最高の圧倒的技巧を誇るヴァイオリニストであるハイフェッツと言えば中二病のあなたはきっとこれ以上なくビクンビクンと刺激され、音は多少古くても「[Tchaikovsky&Mendelssohn:ヴァイオリン協奏曲 \(Jascha Heifetz 演奏\) \(チャイコン: Reiner 指揮、シカゴ交響楽団、1957年\) \(メンコン: Munch 指揮、ボストン交響楽団、1959年\) \(RCA\)](#)」を聴くほかないだろう。

さらに中二病を刺激する「悪魔に魂を売り渡したヴァイオリニスト」パガニーニ<sup>34</sup>の協奏曲「[Paganini:ヴァイオリン協奏曲第1番&第2番『ラ・カンパネラ』\(Salvatore Accardo 演奏、Charles Dutoit 指揮、ロンドン・フィル\) \(1975年、Grammophon\)](#)」は、これほどの難曲を優雅に弾きこなすアッカルドの技術に感服しきりである。

なお、ヴァイオリン協奏曲と言えど誰もが一度は聴いたことのあるヴィヴァルディの「四季」もこのカテゴリである。いろいろな演奏があるが、カルミレリリの細やかな中にも軽やかさが美しい「[Vivaldi:四季 \(イ・ムジチ合奏団、Pina Carmirelli ヴァイオリン\) \(1982年、Decca\)](#)」の録音をお勧めする。ここで紹介した「イ・ムジチ合奏団」といえばバロック時代の室内管弦楽曲専門の楽団であり、私がこよなく愛する「パッヘルベルのカノン」もこの部類に入る。初心者にお勧めの「[I Musici:バロック名曲集 \(1982年、Philips\)](#)」は、全般的に軽い感じの演奏であるが、長々と7分も続くような華やかなカノンが余り好きではない私にとっては、さくっと5分弱で終わるこのCDがベストである。

29 私はブラームス第3番を愛用している。

30 民●書房「20代女性音楽教師とクラシック」より。

31 私はまだ全てがわからない未熟者である。

32 本文で挙げた「チャイコン」「メンコン」のほかに、ベートーヴェンとブラームスのヴァイオリン協奏曲が数えられる。「コン」とはConcerto = コンチェルトつまり協奏曲のことである。

33 「のだめカンタービレ」でも有名である。

34 パガニーニと言えど自らの技巧を誇示するために作り上げたヴァイオリン・ソロ「24の奇想曲」が著名であるが、楽曲としてはそれほど「聴き込む」ものとは言い難い。ヴァイオリニストの登竜門的作品であり、数多くのヴァイオリニストが挑戦しているが、その中でひとつ紹介するなら「[Nicolo Paganini:24の奇想曲 \(Itzhak Perlman 演奏\) \(EMI\)](#)」でのパールマンの演奏は感嘆するほかないだろう。

そしてバロック時代といえば J.S. バッハ。そしてバッハといえばリヒターである。生涯をバッハの研究と演奏に捧げたりリヒター、バッハの管弦楽曲でリヒターが指揮しているものを聴けばまず間違いない。特にバッハの 2 大作が収められた「J.S.Bach : 管弦楽組曲・ブランデンブルグ協奏曲 (Karl Richter 指揮、ミュンヘン・バッハ管弦楽団) (1960 年・1961 年・1967 年、Archiv)」はバッハの管弦楽曲を聴くなら手に入れて然るべき名盤である<sup>35</sup>。

徐々にピアノに軸を移して行こう。ベートーヴェンはここでも力を発揮している。軽快なクレメールのヴァイオリンに力強いアルゲリッチのピアノが駆け回る「Beethoven : ヴァイオリン・ソナタ第 5 番『春』 (Gidon Kremer & Martha Argerich 演奏) (1987 年、Grammophon)」そして「Beethoven : ヴァイオリン・ソナタ第 9 番『クロイツェル』 (Gidon Kremer & Martha Argerich 演奏) (1994 年、Grammophon)」は同じ CD に希代の名演が収められていて超お得。

そしてベートーヴェンのピアノ協奏曲と言えば「皇帝」に尽きる。中でも「Beethoven : ピアノ協奏曲第 5 番『皇帝』 (Maurizio Pollini 演奏、Claudio Abbado 指揮、ベルリン・フィル) (1992 年・1993 年、Grammophon)」は、信じられない優美さと風格が同居する希代の演奏だ。

ここで「展覧会の絵」というタイトルをご存知の方も多だろう。ラヴェル編曲による管弦楽盤の方が聴かれる機会が多い楽曲であるが、もともとはムソルグスキーのピアノ組曲である。そもそも原曲の楽譜の正確なところが不明というミステリアスさを、20 世紀最高のピアニストのひとりホロヴィッツが編曲して世に知らしめた「Mussorgsky : 展覧会の絵 (Vladimir Horowitz 演奏、Arturo Toscanini 指揮、NBC 交響楽団) (1951 年、RCA)」は、観衆の拍手が入るライブ録音であるけれど、トスカニーニとホロヴィッツの才気と情熱がほとばしる名盤だと思う<sup>36</sup>。

さて、満を持して、ピアノと言えばショパンである。ショパンの演奏はこれも数あるピアニストが試みていて、どれを紹介したらいいのか迷いに迷う。有名な「夜想曲 (ノクターン)」ならば私は「Chopin : 夜想曲集 (Arthur Rubinstein 演奏) (1965 年・1967 年、RCA)」の巨匠ぶりを堪能したい。有名な「練習曲 (エチュード)」なら上で紹介したポーリーニの「Chopin : 12 の練習曲 (Maurizio Pollini 演奏) (1972 年、Grammophon)」で奏でられる緻密な演奏を断然にお勧めする。他にもこれも上で紹介したアルゲリッチの「Chopin : 24 の前奏曲 (Martha Argerich 演奏) (1977 年、Grammophon)」や、音がモノラルで古く厳しいかもしれないがどうしてもリパッティの「Chopin : フルツ集 (Dinu Lipatti 演奏) (1950 年、EMI)」は必聴。リパッティの録音の音がもう少しよければ、と無念を禁じ得ない。

## [ その他 ]

ピアノとヴァイオリン以外にもクラシックはたくさんある。その中から、ランパルの珠玉のフルートに巨匠スターンのヴァイオリン、スターンの格に押しやられたのか上でヴァイオリニストとして紹介したアッカルドがヴィオラ担当、そしてチェロのラスボスのひとりロストロポーヴィチという驚異的なメンバーが揃った「Mozart : フルード四重奏曲 (Jean-Pierre Rampal (フルード)、Isaac Stern (ヴァイオリン)、Salvatore Accardo (ヴィオラ)、Mstislav Rostropovich (チェロ)) (1986 年、SONY)」をまずはご紹介。華やかな、という形容詞はこの演奏を評するためにこそあると思わせる美しさである<sup>37</sup>。

チェロのラスボスのひとりとしてロストロポーヴィチを紹介したが、真のラスボスはカザルスという人も多いだろう。

35 かの有名な「G 線上のアリア」はバッハ管弦楽組曲第 3 番 2 曲目「Air」である。ドラクエ 2 の城の BGM の元ネタとして有名である。

36 20 世紀最高のピアニストに必ず挙げられるホロヴィッツは、20 世紀最高の指揮者のひとりであり、フルトヴェングラーと双璧をなすトスカニーニの娘と結婚したので、二人は姻戚関係にある。ひとつ小話を紹介しよう。ある音楽大学のバイト募集の掲示板かどこかに「小さい子供のピアノ教師」という張り紙が出された。なかなかいい条件だったこともあり、一人の音大生がさっそく赴いたところ、「やあ、よく来てくれたね」とにこやかに玄関を開けたのがホロヴィッツ、「娘のおじいちゃんもきみが来るのを待っていたんだ」と招き入れられた部屋の椅子に深く腰掛けていたのがトスカニーニであったという。ラスボス二人を前にしたその音大生のその後を知る者はいない…？

「J.S.Bach : 無伴奏チェロ組曲 (Pablo Casals 演奏) (1936 年・1938 年・1939 年、EMI)」<sup>38</sup> は 1930 年代、もう音が古すぎて厳しいなどというレベルではない。しかしカザルスがたったひとりでチェロを弾くこの演奏は完璧に心を捉えて離さない。

さらに驚異的なのは「J.S.Bach : オルガン作品集 (Helmut Walcha 演奏) (1969 年・1970 年、Archiv)」で奏でられるヴァルヒヤのパイプオルガンである。厳密に、厳格に、飾りを排し、徹底的にバッハの宗教音楽を追求したひとつの到達点がここにある。ヴァルヒヤは幼少のころに罹った天然痘とそれに追い打ちをかけた角膜炎により盲目<sup>39</sup>であるが、そんなことは全く感じさせないこの演奏を聴くとため息しか出ない。特に「パッサカリアとフーガ」のパッサカリア部分は圧倒的である。

また、近時のクラシック的技法と上記で紹介したポストロック、前編で紹介したアンビエント・エレクトロニカのクロスオーバー的なジャンルとして「ポストクラシカル」という音楽がある。主にピアノやヴァイオリン、チェロなどのクラシック楽器に電子楽曲の要素を織り込んで、ヒーリング系よりもメロディアスに、全体を通して穏やかなメロディで構成されている。代表的なアーティストは Goldmund、Max Richter、Hauschka、Sylvain Chauveau あたり、音のイメージとしてはピアノメインの「Goldmund : An Invisible Light」や、ストリングスもゆったりと「Sylvain Chauveau : Nuage」のような感じである。

以上いろいろと紹介してきた。全て私が大好きなクラシックである。紹介した CD の偏りからお分かりであろうが、私はピアノよりもヴァイオリンを好む。ヴァイオリンの音色が私の感覚に合う、という単純な好みのお話だけであるが、上で紹介しきれなかった希代のヴァイオリニストたち、クライスラーやオイストラフやミルシテインの音は何時間でも聴き惚れてしまう。

けれども、私が聴いたことのあるクラシック演奏で、選び難きを選んでひとつだけ挙げろというならば、1 年ほど迷った挙句<sup>40</sup>、それはピアノ曲になるだろう。「J.S.Bach : ゴルトベルク変奏曲 (Glenn Gould 演奏) (1981 年、SONY)」<sup>41</sup> のグールドの演奏は、いったいどうしたらこれを評することができるのか、自らの筆の限界を悟られる。時に作曲者であるバッハの指定した演奏記号をばっさりと無視した独自の解釈により奏でられるその演奏は、ピアノの音を聴いたら心臓が破れるなどの命の危険に遭遇してしまう人以外は必聴である<sup>42</sup>。

## ジャズ／フュージョン

実はこのエッセイの企画は失敗だったのではないかと思うのだ。「ロック」「クラシック」に続きここで「ジャズ」を定義しなければならないというこの暴挙に、今キーボードを叩く私の手は震えている<sup>43</sup>。

学術的に述べるならば、19 世紀初頭に西洋音楽（クラシック）と黒人音楽の融合により生まれ、ホーン（金管楽器、木管楽器）、ピアノ、ベースそしてドラムを中心にした、スイングするリズム<sup>44</sup>と即興性に富んだ音楽の総称をいうだろう。そして即興の部分つまりアドリブパートこそジャズの中核をなすといってもいいだろう。けれど、東方アレンジにおいてそのようなアドリブパートがどこまで重視されているか、それは未知数である。一般に、アドリブパー

37 しかしながら、モーツァルト自身はフルートが嫌いだったそうである。彼の時代のフルートは音が安定せずよく狂っていたからだろうだが、「魔笛」でのフルートの活躍っぷりからすれば信じられない話でもある。

38 京アニ「氷菓」第 3 話 BGM に第 1 番第 1 楽章冒頭が使われている。

39 当然ながら演奏は全て暗譜である。バッハのオルガン曲を、各パートごとに母や妻に逐一正確に弾いてもらい、それを全て暗記し、バッハの意図を正確に汲み、厳格な解釈の下で再構成して完成させていった。40 歳ころまでにバッハの鍵盤楽曲全てを暗譜し切ったそうである。

40 もう 10 年ほど迷ってきた。

41 グールドのゴルトベルク変奏曲はもうひとつ 1955 年録音のものがある。彼の解釈の違いにより 55 年盤は進行が早く、81 年盤とは全くの別物なのでご留意。しかしながら 55 年盤も屈指であり、まあとにかくバッハのピアノ楽曲ならグールドを聴いておけば間違いはない。別格である。

42 ただひとつ要注意。グールドは演奏中に自分でそのメロディをハミングする。演奏会のみならずスタジオでの録音でも思い切り歌いまくる。エンジニアが大変に心を砕いて音を消そうとしているようだが、明確に彼の鼻歌は録音に入っている。何とていうか、そういうのがダメな人にはグールドの演奏は向いていない。小さな子供用の椅子に座って背を丸めてピアノに向かい、フンフンと心地よさげに歌いながら、グールドは CD の中で生き続けている。1982 年、50 歳にて逝去。早すぎる死である。

43 5 月の割に冷える風呂上がりである（無駄な報告）。

44 スイングとは、4/4 拍子で 8 音符を 8 つ並べた場合、その並んだ 8 分音符の奇数個目の音（表拍）が少し長く伸び、偶数個目の 8 分音符の音（裏拍）が後ろに押しやられて少し短くなるようなリズム感をいう。明らかに文章の限界であるので、[こちらのサイト](#)で実際にリズムの変化を確認してほしい。



トは「何か演奏者が適当に思い付いたフレーズを奏でている」ように受け止められているのではないだろうか。実際には、そこにはその前後に演奏されるその曲の「テーマ」のメロディが密接に関係しており、「テーマ」に従った厳密なコード進行が存在する。それに従いつつ、演奏者がその個性により場の雰囲気に応じて即興で演奏するところが聴きどころ<sup>45</sup>なのだが、それはつまり「テーマ」のメロディやコード進行などを理解していないとじっくりと楽しめな部分でもある<sup>46</sup>。

そんなことを考えながら東方アレンジを聴いている人は極めて少ないと断じていいだろう。そこで、ここでいう「ジャズ」とは、「ホーン（金管楽器、木管楽器）、ピアノ、ベースそしてドラムを中心にした黒人音楽っぽい音楽」と強引にくることにする。異論は認める。

そして「フュージョン」とは、ジャズをベースにロックやポップス、テクノなど他のジャンルの要素を取り入れてクロスオーバー、融合させたものとしていこう。

東方アレンジではまず「[Azure & Sands](#)」が著名であろう。ジャズアレンジを前面に押し出した「[Azure & Sands : 東方 JAZZ-2005](#)」から、ジャズアレンジに取り組むサークルが徐々に増加していった。また「[Swing Holic](#)」も酒にばっちり合うジャズアレンジを連発していた。中期「[UI-70](#)」はフュージョンアレンジの鉄板的存在だったと思う。また、近時では「[flap+frog](#)」の軽やかでおしゃれなジャズアレンジに注目だ。

これらのジャズアレンジを聴いている方々に何をお勧めしていこうか。本格的なジャズはそもそも志向するところが違うような気がするので、基本的に初心者向けということを意識して紹介していく。そう、我々はまず平々凡々な「一般人」にならなければならないのだ。

しかしながら、ジャズを紹介するならば Charlie Parker と Miles Davis を、そしてその入門編「[Charlie Parker : Charlie Parker with Strings](#)」「[Miles Davis : Kind of Blue](#)」を聴かないわけにはいかないだろう。ジャズの演奏技法のひとつである「ビバップ」<sup>47</sup>の帝王 Charlie Parker、そしてそのビバップから「モード」<sup>48</sup>へと、ジャズを根本から変えてしまったばかりでなく、他ジャンルの音楽にも影響を与えまくった希代のトランペット奏者「ジャズの帝王」Miles Davis は、1959 年<sup>49</sup>、恐らくこのエッセイを読んでいる誰もが生まれていないだろう年に、既にこの音を完成させていた。

この1960年まわりがジャズの革命期である。管楽器好きの人ならもうひとつ Miles Davis が参加している「[Cannonball Adderley : Somethin' Else](#)」の巧みなトランペットとサックス、「[Sonny Rollins : Saxophone Colossus](#)」のストレートなジャズっぽさ、いつもの激しさとは真逆の「[John Coltrane : Ballads](#)」の甘すぎるサックス、そしていろいろ調べた評論家の間では評価が低いが「[Paul Desmond : Take Ten](#)」の「Black Orpheus」は何だかずっと聴いていくくなるサックスだ。ピアノ好きなら「[Sonny Clark : Cool Struttin'](#)」スタンダードなジャズ・ピアノの味わい、「[Oscar Peterson : We Get Requests](#)」はいわゆるアンコール集的な小品の詰め合わせで初心者にお勧めである。

もう少し新しいところで聴いてみると、というか上に紹介した 60 年代ジャズとは完全にかき離れるけれど、初心者にもお勧め「[David Sanborn : Best of David Sanborn](#)」収録の「The Dream」では素晴らしい「泣きのサックス」が聴ける。さらにポピュラーなフュージョン系サックス奏者「[Kenny G : The Moment](#)」のロングトーンは圧倒的であ

45 ジャズの CD の曲目を見ると、同じ曲の「テイク 1」「テイク 2」などのバージョン違いが収録されていることがある。演奏者たちの息遣い、掛け合いと解釈の違いであり、同じ曲は同じように奏でられることがない。クラシックと似ているところであろう。

46 ジャズの敷居が高いゆえんである。アドリブパートは適当に奏でられているのではない、といわれても、一般にはその規則性を容易につかむことはできないだろう。偉そうに書いている私もまったくもってなかなか… ジャズは「難しい」です><

47 西洋クラシックのコード進行を厳しく遵守しつつも転調転調また転調により急展開するアドリブが特徴である。上で述べたジャズの定義がもっともかつちりと当てはまる。そしてご存知、というには古すぎるかもしれないが、1998 年のアニメ「カウボーイ・ビバップ」のビバップである。音楽は菅野よう子、全編通してジャズ調の BGM が多い。なお、さらに古い 1983 年から始まっていた漫画「BE-BOP HIGHSCHOOL」の「BE-BOP」とは、スベルは同じであり、意味合いも「自由奔放な」というイメージは共通するが、音楽的にはどうやら関係ないようである。

48 もともとは中世教会音楽の技法であり、中心となる音をひとつ決めて、あとは自由に音を当てはめていく、などと書くときと詳しい人から怒られてしまう。しかしここで「スケール」などの理論を説明してもしょうがないので、とりあえず上記「ビバップ」の束縛に縛られるのを嫌ったジャズ演奏家たちが創り上げていった、より自由な新しい曲の形、というイメージでここはひとつ。

49 キューバ革命の年である。週刊少年マガジンと週刊少年サンデーがともに創刊、プロ野球の王貞治のルーキーイヤーであり、[6月の天覧試合で長嶋が村山からサヨナラホームラン](#)を放った。

る<sup>50</sup>。また、若者というわけではないが<sup>51</sup>、つい12,3年前に待望の大復活を叶えた「[Keith Jarrett : The Melody at Night with You](#)」はシンプルなピアノのメロディが沁みに沁み渡る。

日本人で有名なのは「[上原ひろみ : Brain](#)」のピアノ、際立つ個性で押しに押しまくる演奏は好き嫌いが分かれるだろうが圧巻である。また、これはジャズなのかどうなのか、とりあえずジャズのカテゴリで紹介されていることが多い「[→ Pia-no-jaC ← : 台風](#)」はピアノとカホンという打楽器だけで構成される風変わりなユニットで、疾走感のある演奏が気持ちよい。

ざっと紹介してきたが、やはりジャズはどうしても古い時代にリリースされた作品の完成度が高い。60年代に隆盛を迎え、そして手詰まりになって暗中模索、まだまだ迷走しているというイメージがどうしてもジャズにはあるのだ。そういう行き詰まった時にこそ、古き良き60年代周辺の時代で私がこよなく愛するジャズピアニスト巨匠 Bill Evans のリバーサイド三部作<sup>52</sup>だろう。中でも当然「[Bill Evans : Waltz for Debby](#)」<sup>53</sup>は、特に1曲目「My Foolish Heart」と2曲目「Waltz for Debby」にため息が漏れてしまう名盤中の名盤、きっと皆さまも耳にしたことがあるだろう。ジャズの中で、私の一番のお勧めである。

今まで、大きなジャンル分けとして、前編でテクノ系電子音楽を、この後編でロック、クラシック、ジャズをそれぞ

## その他

れ紹介してきた。これらに該当しないジャンルも多々あることは承知している。しかし、それを全て網羅するにはこの稿の余白が少々足りない<sup>54</sup>。さらに言えば、余りマイナーなジャンルに突っ込んでしまうと、例えば何を間違ったか「ドローン」<sup>55</sup>というジャンルを買い漁ってしまうなど、マイナージャンルに没入しすぎて音楽の話が全く通じなくなるという危険性がある<sup>56</sup>。この稿は、あくまで音楽の話をするときに「一般人」として振舞うことを目的とするものなのだ。

そこで、以下は「その他」として、今まで紹介していない音楽ジャンルで、それなりに一般受けしそうなものをいくつか見ていこうと思う。

### [ アコースティック・ギター ]

アコースティック・ギター1本で奏でられる曲は素朴に、時に激しく、素晴らしいシンプルさで我々を包み込む。東方では「[孟世 : Anima シリーズ](#)」が著名であろう。基本的にゆったりとした淋しいメロディは郷愁を誘う。

東方アレンジではアルバム1枚まるまるアコギアレンジは多くはないが、一般音楽という括りをするとなアコースティック・ギターの名手は数多い。エレキギターやピアノとともに人口に膾炙している楽器である。日本人で真っ先に思いつく著名な奏者は、そのヴィジュアルでも人気を博する「[村治佳織 : Portraits](#)」だろうか。クラシック・ギターというジャンルが日本で広まったのは彼女のテレビ出演等精力的な活動によるところが大きい。同じくクラシック・ギターの「[福田進一 : 福田進一 Plays Bach](#)」<sup>57</sup>の繊細な音遣いはため息なくして聴けないだろう。そして日本の

あとイケメンである。女性に大人気で一世を風靡した。私もかつて、そう20年ほど前だったか、テレビで Kenny G を初めて見た瞬間「やだ… 何このイケメン」と呟いてしまったのは男としての敗北であった。すいません嘘つきました20年前にイケメンという言葉はありませんでした。夙に言われる「Kenny G はそもそもジャズなのか」という点は、サックスロングトーンギネス記録保持者(45分47秒。息を吐きながら同時に吸う「循環呼吸」でロングトーンを可能にしている。)の奏でるしんみりとした音を聴いてから論じて遅くはないだろう。

むしろ Miles Davis のバンドに加入していたくらいにキャリアがある Keith Jarrett は、90年代前半に大病を患い、長い間療養していた。

他に「[Bill Evans : Portrait in Jazz](#)」「[Bill Evans : Explorations](#)」そして四部作目として「[Bill Evans : Sunday at the Village Vanguard](#)」のライブ盤が名作である。いずれもベースは Scott LaFaro、Autumn Leaves (枯葉)の Evans との掛け合い演奏は何度聴いても感嘆しきりである。Scott LaFaro は、この Village Vanguard でのライブ盤を収録した10日後に交通事故で亡くなってしまった。享年26歳にして、もう彼と Evans の掛け合いの演奏は残っていない。

この Amazon のリンク先は日本国内盤(かつリマスタリング前の旧盤)である。輸入盤より少々お高い。しかし輸入版は、曲順がオリジナルとは異なる「同じ曲の別テイクを連続して並べる」というどうにも飽きる仕様である。この国内盤はオリジナルと同じ曲順であるので、アルバムの世界観という意味でこちらを紹介。ついでに言うと、リマスタリングされた新盤は、曲順はオリジナルに戻したものの、各曲の最後をフェードアウトさせるという悲しい仕様であり、リマスタリングされたという割にはそこまで音がよくなっていないように個人的には思える。いずれにしても聴くら日本国内盤かつ旧盤である。

校正者とレイアウト担当者の時間も足りない。そもそも前回に引き続きこの稿のせいで新刊が落ちるのではないかという圧倒的恐怖感に苛まれている。ただいま5月23日午後9時30分を回ったところ。ああ、手が震えてきた。

「[Celer:Butterflies](#)」「[Koda:Movements](#)」「[Chris Herbert:Mezzotint](#)」「[Christopher Bissonnette:In Between Words](#)」「[Zimiamvian Night:Zimiamvian Night 2](#)」「[Thomas Koner:Daikan](#)」など、綺麗系または低音でも静かなドローンが好きである。Sun 0)) や William Fowler Collins 方面のダーク・アンビエント、ドゥーム系ドローンはどうも食指が動かない。メタル好きの人は、60分間ひたすらギターの轟音が襲い掛かる耐久レースに参加してみるのもいいだろう。いずれにしても、ドローンとは基本的に単音を数分から数十分引張って持続させる曲である。耳が慣れないうちは「これは曲ではなく音ではないか」と思うような単調っぷりである。しかしハマった人にとっては宝の山である。

ドローンというジャンルを知っている友人は一人もいない。そもそも友人が少ないだろうというツッコミは心が折れるのでやめてほしい。

このCDの2曲目「J. S. Bach : 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番」のうち「ガボット」(Gavotte)は聴き覚えがあるかもしれない。原曲はヴァイオリンのソロだが、ギターを始めいろいろな楽器用にアレンジされている名曲である。そういえばこのアコギアレンジが「Sisters ~ 夏の最後の日 ~」のBGMに使用されていたはずだ。リンクを張らないのはこれが圧倒的18禁だからであるのでご留意を。延期に延期を重ねたこのタイトルは上々の売れ行きで、発売元の Jellyfish は一息ついただろうが、その後全く音沙汰がない。果たして次作開発まで会社が保つのか心配である。

アコギ奏者で忘れてはいけない「[押尾コータロー : Starting Point](#)」の技巧と情感の同居には感服。

押尾コータローを紹介したなら「[Michael Hedges : Aerial Boundaries](#)」の超絶テクニックも必須だろう。押尾コータローの奏法は Michael Hedges の影響を強く受けている。それ系の若いギタリストなら「[Justin King : Le Bleu](#)」がテクニックとともに幅広い表情を見せる。また、世界三大アコースティック・ギタリストに数えられた「[Al Di Meola : Elegant Gypsy](#)」そしてその CD に収録されている「Mediterranean Sundance」を世界三大アコースティック・ギタリストが集結・競演したライブ盤「[Paco De Lucia, John McLaughlin, Al Di Meola : Friday Night in San Francisco](#)」は余りにかっこいい。

そして何と言っても、アコースティック・ギターと言えば Tommy Emmanuel は必聴だろう。アコギの神様とまで言われる神業テクと豊かなエンタテインメント精神にあふれた演奏は素晴らしい一言に尽きる。とりあえず「[Tommy Emmanuel : Classical Gas](#)」あたりを聴いてみるとよい。そして「[Tommy Emmanuel : Only](#)」を求めるとよい。鉄板ではあるがアコギ一番のお勧めである。

## [ 民族 ]

一般には特定の民族固有の土着的音楽全般のことを言うが、本稿では、特に人気のある「ケルト系、中華系の楽器」をメインに紹介していこう。民族、ワールドミュージックといえ他にもサンバなどがあるのだが、東方アレンジや日本人の好みの傾向を見ると明らかにケルト系と中華系が強い。

東方アレンジで民族調といえまず「[k-waves LAB : 幻想郷に恋したミュージ](#)」を始めとするアイリッシュ・ケルト系が著名であろう。最近のものでは「[Floating Cloud : 幻想郷事変](#)」で全編生演奏による多彩なケルト系アレンジを聴くことができる。また、「[餃子屋本舗 : 東方二胡シリーズ](#)」は二胡を用いた打ち込み系中華・シルクロード風アレンジ、「[ジャージと愉快的仲間たち : El Pasado Ausente](#)」は南米民族調フォルクローレアレンジだ。全般的に、東方アレンジにおいては郷愁を誘う曲調が人気を博しているように見える。

一般曲で民族調といえ「[Enya : Caribbean Blue](#)」を外すことはできないだろう。日本でケルト系民族音楽の人気が高いのは彼女に負うところが大きい。また、2006 年トリノ五輪でフィギュア・スケーターの荒川静香がエキシビジョンで演じた「[Celtic Woman : You Raise Me Up](#)」は、日本で最もたくさんの人が同時に聴いたアイリッシュ系ミュージシャンではなかろうか。他にも長いキャリアを誇る「[Altan : As I roved out](#)」は必聴、アイリッシュとは違う哀愁を漂わせるスペインケルト系の「[Luar Na Lubre : Romance de Don Gaiferos](#)」も味わいがある。変わったところでは、架空言語によるアフリカ民族系のような雰囲気を出す「[Adiemus: Beyond the Century](#)」<sup>58</sup> も面白い。また、ファンには申し訳ないが Bjork はここに分類するほかないだろう。Bjork はアブストラクト系、デジロック、エレクトロニカ、ポップス、オルタナティブなど様々なジャンルに渡り活躍しているので、どうやってくくったらよいかもはや分類できないのではないだろうか。Bjork というジャンルであると言われてしまえばそれまでもと言える。まあ異論がある人もない人も、あ、Chris Cunningham 作の PV だからやや不気味系閲覧注意ではあるが「[Bjork : All Is Full Of Love](#)」を聴いてどっぴりと Bjork の世界に浸るといい。

58 NHK スペシャル「世紀を越えて」のテーマソングである。



そして民族音楽での私の一推しは、私が中高時代から愛聴している ZABADAK である。日本のケルト系民族音楽のユニットで、1985 年結成という長いキャリアの中でボーカルの変遷が激しいのであるが、最初期の上野洋子<sup>59</sup> 時代がどうしても形容しがたい素晴らしさである。「ZABADAK : 五つの橋」「ZABADAK : 遠い音楽」など紹介したい曲がたくさんあるのであるが、申し訳ない、どこを探しても公式の音源がない。初期のものを含めお得と思われる「[ZABADAK: 20th](#)」を求めるのが手っ取り早いはずだ。正統派アイリッシュ系ケルトの調べに天上の透明感、疲弊した今の日本にぴったりの曲ではないだろうか。

---

## おわりに

---

長々と、本当に長々とここまで音楽を紹介してきた。総紹介曲数は実に… えーと、その、いいネタになるはずなのに何で数えていなかったのか、私の文章企画力を疑うところであるが、とにかくこれもひとえに、皆さまをして立派な「一般人」とならしめるがためである。きっとここまで読了されたならば、これからは音楽の話題を振られてもキョドることなく、さらりと一般のミュージシャンやタイトルが口をついて出るに違いない。皆さまの成長をこうして見届けることができ、私も安心して、上述 ZABADAK のところを書いていて思い出した「[リン・ミンメイ \(飯島真理\): 愛・おぼえていますか](#)」<sup>60</sup> を聴けるというものだ。セル画アニメの最高峰のひとつに間違いなく挙げられるだろう劇場版最後の戦闘シーンを思い返すに鳥肌が立ちちょっと待て私はなぜアニメの話をしているのか。一般人になれたよ万歳で稿を締めるところではなかったのか。こうして文章を書いていると自然とアニメ方面の話になってしまう。これは重症である。音楽の話をしていても自然と東方アレンジの話になって、こうして化けの皮がはがれないよう、皆さまにおかれてはさらに一層の精進を期待したい。

私がまだ聴いていない音楽はこの世の中にたくさんある。そしてこれからも新しい音楽がたくさん作られる。プロであろうが同人であろうが、そこには無限の可能性があり、それゆえに私はこれからもきっと音楽を聴き続けることだろう。

そして皆さまも願わくばそうであってほしい、と私は思うのである。

*Fin.*

59 マクロス「愛・おぼえていますか」のカバーやあずまんが大王の OP・ED も手掛けたことでご記憶の方もいるかもしれない。透明感あふれる声と妙な楽器を携えるステージ・パフォーマンスが記憶に残る。

60 リン・ミンメイの劇場版での愛らしさは特筆に値する。値するが、いかんせん着ている服が当時の記憶でもちょっと、まあ、その、有体に言えばダサイような気がする。大丈夫か銀河系アイドル。あと巨大マグロの頭をそのまま鍋にぶち込むシーンが忘れられない。何だあの鍋。